

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

**バードマン あるいは
(無知がもたらす予期せぬ奇跡)**

2014年・アメリカ映画
配給/20世紀フォックス映画・120分

2015(平成27)年4月12日鑑賞 TOHOシネマズ西宮OS

Data

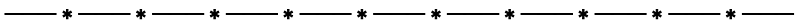
監督・製作・脚本: アレハンドロ・G・イニャリトウ

出演: マイケル・キートン/ザック・ガリフィナーキス/エドワード・ノートン/アンドレア・ライズブロー/エイミー・ライアン/エマ・ストーン/ナオミ・ワッツ/リンゼイ・ダンカン/メリット・ウェヴァー/ジェレミー・シャモス/ビル・キャンブ/ダミアン・ヤング

👁️👁️ みどころ

奇々怪々ともいえる賞取りレースの末に、第87回アカデミー賞作品賞、監督賞は『バットマン』ならぬ本作がゲット！タイトルからは何の映画かサッパリわからないが、『21グラム』(03年)や『パベル』(06年)のアレハンドロ・G・イニャリトウ監督と知れば、その才能と映画界の「メキシコ革命」に注目し、しっかり勉強したい。

かつての栄光を追い求める、落ちぶれた中年男は世の中に多いが、再三スクリーン上に登場する「バードマン」が語りかける「内なる声」とは？そして、それを否応なく聞かされ続ける主人公の奇怪な行動とは・・・？しかし、あなたは自分の「内なる声」とどう向き合い、それをどう聞く？



■このタイトルはナニ？—瞬『バットマン』と錯覚？■

近時のハリウッドはアメコミ全盛となっているため、はじめて本作のタイトルを見た時、私は一瞬『バットマン』シリーズの1つと錯覚してしまった。『バットマン』ならぬ、『バードマン』って一体ナニ？また、サブタイトルになっている『あるいは(無知がもたらす予期せぬ奇跡)』(原題もほぼ同じ)って一体ナニ？しかも、本作の主人公リーガン・トムソンを演ずるマイケル・キートンは、『バットマン』シリーズのうち『バットマン』(89年)と『バットマン リターンズ』(92年)の2本で現実にバットマンを演じた俳優。そのうえ、本作でリーガンと共にブロードウェイの舞台に立つマイク・シャイナーを演じたエドワード・ノートンは『インクレディブル・ハルク』(08年)、『シネマルーム20』32頁参照)でブルース・バナー(ハルク)役を演じ、本作でリーガンの付き人をしている

リーガンの一娘サムを演じたエマ・ストーンは『アメイジング・スパイダーマン』（12年）、『アメイジング・スパイダーマン2』（14年）でグウェン・ステイシー役を演じた俳優だから、余計話はややこしい。

そこで、チラシやネット資料を調べてみると、どうも本作は『バットマン』ならぬ『バードマン』シリーズで世界的な映画スターとなりながら、今や落ちぶれてしまっている主人公リーガンが、ブロードウェイの舞台



『バードマン あるいは（無知がもたらす予期せぬ奇跡）』
© 2014 Twentieth Century Fox 20世紀フォックス映画
TOHO シネマズ梅田ほかにて絶賛公開中

俳優として復活を目指す物語らしい。かつて栄光に輝きながら、今や落ちぶれてしまった男が復活を目指す物語は、ボクシング映画では『ロッキー』シリーズや『シンデレラマン』（05年）（『シネマルーム8』218頁参照）等があるし、プロレス映画では『レスラー』（08年）がある（『シネマルーム22』83頁参照）。さて、映画や演劇の世界での復活物語は・・・？

■この監督に注目！映画界の「メキシコ革命」に注目！■

本作のパンフレットには、宇野維正氏の「2010年代ハリウッドを席卷するメキシコの“三本の矢”」という興味深い「CONNECT i ON」があり、本作の監督であるアレハンドロ・G・イニャリトゥを核とした人脈と作品の相関図がまとめられている。その相関図には、『シティ・オブ・ゴッド』（02年）、『モーターサイクル・ダイアリーズ』（04年）（『シネマルーム7』218頁参照）、『ブロークバック・マウンテン』（05年）（『シネマルーム10』262頁参照）、『ノーカントリー』（07年）（『シネマルーム18』21頁参照）、『ツリー・オブ・ライフ』（11年）（『シネマルーム27』14頁参照）、『ウルフ・オブ・ウォールストリート』（13年）（『シネマルーム32』38頁参照）等々の作品とイニャリトゥ監督の人脈が並んでいる。当然ながら、私も大いに注目しながら鑑賞した同監督の『21グラム』（03年）（『シネマルーム4』257頁参照）や『バベル』（06年）（『シネマルーム14』340頁参照）も並んでいる。『21グラム』も『バベル』も一般的なハリウッド映画とは全然趣を異にする問題作だったため、私には強く印象に残っている。したがって、本作を鑑賞するについてはまず、このイニャリトゥ監督に注目したい。

さらに、宇野氏の分析によれば、そんなイニャリトゥ監督と、『ゼロ・グラビティ』（1

3年) (『シネマルーム32』16頁参照) で2014年の第86回アカデミー賞で監督賞を含む7部門を受賞したアルフォンソ・キュアロン監督、そして、『21グラム』や『チェ』(08年)に出演したスペイン人俳優ベニチオ・デル・トロという3人のメキシコ映画人の創造力がハリウッドを席卷するようになって久しいらしい。そして、相関図からわかるとおり、「イニヤリトゥ、キュアロン、デル・トロを中心に、広くスペイン語圏の映画人、さらにはそれぞれの出演者やスタッフがゆるやかに結びついて、いまや一大勢力となっている3人のコネクション」が形成されており、「映画界の“メキシコ革命”は現在も進行中である」とされている。したがって、本作を鑑賞するについては、次にそんな、映画界の「メキシコ革命」にも注目したい。

■聞き慣れないこの劇中劇は一体ナニ? ■

本作では、サブタイトルの意味がわかりにくいと同じように、本作の劇中劇として使われているレイモンド・カーヴァーの『愛について語るときに我々の語ること』も聞き慣れないもので、わかりにくい。パンフレットにある、巽孝之氏(慶應義塾大学文学部教授・アメリカ文学専攻)の「RAYMOND CARVER」には、「レイモンド・カーヴァーの名は、70年代以降のアメリカ文学におけるミニマリズムの立役者として刻み込まれている。88年、50歳で急逝してから没後30年近いものの、我が国では村上春樹の翻訳で、広く読まれているだろう」と書かれているが、活字離れ、本離れが甚だしい近時、この本を知っている人は少ないはずだ。

第71回アカデミー賞作品賞を受賞した『恋におちたシェイクスピア』(98年)は劇中劇の面白さを堪能させてくれたが、本作で劇中劇として使われるレイモンド・カーヴァーの『愛について語るときに我々の語ること』は、その奇妙なタイトルからわかるとおり、「愛は時に奇妙で不条理で神秘的契機にすらなることを雄弁に語る作品」らしい。リーガンが自身の脚色、演出、主演によるブロードウェイの上演を企画している『愛について語るときに我々の語ること』は、本作では、①プレビュー公演の前日、②プレビュー公演の当日、③ブロードウェイの舞台での初日等で上演される。そして、そこにリーガンと共に登場する役者がマイク・シャイナーとレズリー(ナオミ・ワッツ)の2人だ。

巽氏の「RAYMOND CARVER」には、「作中、いまはメル妻となっているテリが語る元彼エドは、彼女にDVたる虐待をさんざん加えたあげく世にもぶざまな拳銃自殺におよぶが、しかしテリ自身は、エドにはまぎれもなく愛があったと断言するのだ」と書かれているから、かなりシリアスな劇であることはまちがいない。現実にも、マイクとレズリーがベッドの中にいるのを発見したリーガンが拳銃自殺をするという「あつと驚く結末」で舞台は終わるが、そこでのリーガンの服装はパンツ1枚というところも面白い。リーガンがこの劇の上演を自分自身の人生の起死回生策と位置付けていたのは当然だが、本作全編を通じて「こんなクソ芝居はやめろ」とケチをつけ、責めたてるのが、決別した

はずのバードマン。なるほど、これがバードマンか、というバードマンの姿がスクリーン上に登場するので、それにも注目！

■□■第87回アカデミー賞作品賞、監督賞の行方は？■□■

『キネマ旬報』は、近時、毎年3月上旬号と4月上旬号に渡辺祥子、細越麟太郎、襟川クロの3氏によるアカデミー賞予想の座談会と受賞結果を受けての座談会を掲載している。しかして、第87回アカデミー賞についての3氏による作品賞と監督賞の予想は、ハリウッドでも最優秀作品賞受賞が確実視されていた『6才のボクが、大人になるまで。』（14年）だったが、結果はどちらも本作に。

『キネマ旬報』4月下旬号は本作を特集しているが、そこでは鬼塚大輔氏の「アカデミー賞の『リアル』」が興味深い。そこでは、①「ワインスタイン・カンパニー社長のハーヴェイ・ワインスタインという御仁のなんでもありのオスカー・キャンペーンのおかげで、もともと熾烈だったオスカーを受賞するための事前運動がより過激に、なりふり構わぬものになった」、②「とまあ、あらゆるメディアを動員し、表に裏にと、このようになりふり構わぬ宣伝、足の引っ張り合いが展開され、札束も乱れ飛ぶというのがオスカーレースの、あまり美しくもない一面である」と書かれている。そんななか、最優秀作品賞受賞が確実視されていたのが『6才のボクが、大人になるまで。』（14年）だが、その「風向きの変化が大きな話題となり、アカデミー賞も結局『バードマン』に与えられると、アメリカのメディアには様々な分析が踊ることとなった」そうだ。

しかして、鬼塚氏の「まとめ」は①「近年、ますます激しさとえげつなさを増す事前キャンペーンにうんざりした会員たちが、(比較的)地味なキャンペーンだった『バードマン』に行為を持ったという可能性を指摘する声もある。となれば『6才のボク〜』はキャンペーンのやり過ぎで自爆したとも言える」、②「とまあ、オスカー・キャンペーンの裏側と、『バードマン』が最優秀作品賞を受賞した背景には、様々なものが見え隠れしている」というものだ。

結果的に第87回アカデミー賞では、本作が作品賞、監督賞、脚本賞、撮影賞と最多4部門を受賞し、『キネマ旬報』4月上旬号「第87回アカデミー賞 結果座談会」では「予想はハズレたけれど、結果は納得です」という結論に落ち着いているが、なるほど、賞取りレースとはそういうもの・・・？

■□■「内なる声」とどう向き合い、それをどう聞く？■□■

本作の主人公リーガンは、スーパーヒーロー映画『バードマン』に主演していた時は得意の絶頂期にあっただけでなく、また、そんな自分に疑問を感じることもなく、日々満足感に溢れていたはずだ。しかし、今は長いスランプの中に・・・。仕事の面では、次なる代表作は全く登場しないという世間から見向きもされない状態だし、私生活では結婚に失敗したう



『バードマン あるいは（無知がもたらす予期せぬ奇跡）』
© 2014 Twentieth Century Fox 20世紀フォックス映画
TOHO シネマズ梅田ほかにて絶賛公開中

スクリーン上に登場するバードマンだ。もちろん、このバードマンの姿が見えているのはリーガンとスクリーンを覗いている私たち観客だけで、リーガンの周囲の人たちにはその姿が見えないから、バードマンと対話しているリーガンの姿が異様に見えるのは当然だ。

『キネマ旬報』4月下旬号のインタビューで、イニヤリトゥ監督は「それにしても、かつて自分が演じたスーパーヒーロー『バードマン』が主人公にだけ見えるというアイディアは、どこから生まれたのだろうか？」との質問に対して丁寧に答えているが、本作をアカデミー賞作品賞、監督賞受賞作に押し上げた最大の要因はそのアイディアにあることはまちがいない。さらに、続けてイニヤリトゥ監督は「イニヤリトゥが一番思い飛ばしたいのは『自分の内側にある、強大なエゴ』だという。『時には自分ほどの天才はいないと思うのに、20分後には、いいや自分はダメだ、お終まいだと落ち込む。何とも厄介だよ。でもこの両極端な思いを支配している“エゴ”を映画にしたら、面白いんじゃないかと思ったんだ」と答えているが、なるほど なるほど・・・。

イニヤリトゥ監督は、自分自身の「内なる声」を聞く中で本作を構想し、本作の主人公リーガンには、否応なくかつてのスーパーヒーロー、バードマンからの「内なる声」が聞こえてくるというアイディアを軸として本作のストーリーを作っていったわけだ。しかし、本作を鑑賞して私が何よりも大切だと思うのは、自分自身の「内なる声」とどう向き合い、それをどう聞かかということ。「内なる声」などその存在すら知らないという人はいないはずだが、人間は往々にして「内なる声」のうち都合の悪いことは無視したがるもの。しかし、それではダメだということが本作のリーガンを見ているとよくわかる。その結果、たとえパンツ1枚でブロードウェイのど真ん中を歩くことになったとしても、それが必ずしもマイナスになるとは限らないことを本作は教えてくれている。さあ、あなたは自分の「内なる声」とどう向き合い、それをどう聞く？

2015（平成27）年4月14日記